

事例3  
地理・  
日本史・英語

多角的な視点から社会問題に  
アプローチする教科横断型授業を実施

石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育類附属高校 宮崎嵩啓



みやざき たかひろ  
教職歴3年。同校に赴任して4年目。研究企画部。W/L委員。

授業のねらいと内容

問いを工夫し、  
生徒の「常識」に切り込む

金沢大学人間社会学域学校教育類附属高校は、2020年2月、2年生の文系クラスで、地理・日本史・英語による教科横断型授業(全3時間)を実施した。テーマは、『糞』で考える循環型社会。誰もが関係する問題をテーマにすることで、生徒に当事者意識を持たせようと考えた。

1時間目は、知識構成型ジグソー法(\*1)の手法で、1クラスを2分割して地理と日本史の授業をそれぞれ行った。日本史担当の宮崎嵩啓先生は、授業づくりで意識した点を次のように説明する。

「社会問題の多くは、複数の要素が複雑に絡み合っているため、多角的な視点からのアプローチが必要になります。解決策はすぐには見つからず、むしろ考えれば考えるほどモ

ヤモヤ感が募るはずですが。そこで、地理と日本史で異なる視点から糞の問題を取り上げ、その後の展開を通じて生徒が1つの事象を多角的に捉えられるようにしました」

日本史では、糞尿の処理・利用の歴史について学んだ後、巨大災害や人口減少の時代にふさわしい糞尿処理システムを考えました。地理では、性の捉え方は多様であり、「身体の性」「心の性」「対象の性」などがあることを示した上で、「外見の性で男女を分けている今のトイレは適切か」と、生徒に問いかけた。地理担当の室谷洋樹先生は、トイレを切り口にジェンダー・セクシュアリティの問題を取り上げた理由をこう語る。

「多くの生徒は、外見の性で男女を分けることに疑問を感じていないと思います。その常識に揺さぶりをかけ、生徒が持つ概念を壊し、問題に対する認識を再構築する体験をさせることをねらいとしました」

2年生 地理歴史(地理・日本史)、英語「『糞』で考える循環型社会」概要

【設定時数】全3時間 【テーマ】未来のトイレのデザインを、地理的(空間的)、歴史的(時間的)視点を踏まえて考える 【単元目標】これからの循環型社会について協働して考え、表現する

時数	内容	授業の流れ
1	A班 [日本史] 糞尿の処理方法の歴史を学ぶ	①日常生活における、廃棄物処理の過程を確認する。 ②江戸時代や前近代日本での糞尿の処理方法について考察する。 ③現代の糞尿処理システムについて知る。
	B班 [地理] 性別によってトイレが分かれている理由をグループで考察	①性別によって分けられている空間を挙げる。 ②女子トイレに入ってよい・入ってはいけないを分ける基準について考察する。 ③対象の性・外見の性について考察する。
2	[英語] リサイクルシステムについて理解する	①リサイクルシステムに関する4種類の課題文を、グループ内で手分けして読み、課題文にタイトルをつける。 ②グループ内で4種類の課題文の内容を英語で伝え合うリテリングを行う。 ③4種類の課題文の共通点を話し合う。
3	[英語] リサイクルシステムについて理解する	①前時の内容をグループ内で確認(英語リテリング)。 ②グループで理想的なトイレについて話し合う(使用言語:日本語)。 ③ワールドカフェ形式でアイデアを共有(使用言語:英語)。 ④元のグループに戻り、他グループのアイデアを共有(使用言語:英語)。 ⑤個人課題:「理想のトイレ」を英語で表現。



写真は、単元の指導計画作成の様子。左から、地理担当の室谷洋樹先生、英語担当の真木啓生先生、日本史担当の宮崎先生。まず、本単元で生徒に身につけさせたい視点・能力として、「当事者意識」「レジリエンス(弾力性)」「課題発見/解決能力」の3点を設定。それらを横断する題材として「トイレ」に着目した。そして、日本史は時間軸、地理は空間軸、英語は国際軸といった観点から、学習内容と授業展開を検討した。3人以上にも様々な教科の教師に相談して授業づくりをしたという。

学校プロフィール ◎設立 1947(昭和22)年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年約120人 ◎2020年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東北大、東京大、金沢大、京都大、大阪大などに53人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ86人が合格。  
◎URL <http://partnered.kanazawa-u.ac.jp/kfsh/>

\*宮崎先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

\*1 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。

授業の工夫

異なる知識や考えを持ち寄り、最適解を見つけ出す場面を設定

2時間目の英語の授業でも、知識構成型ジグソー法の手法を取り入れた。地理を受けた生徒と日本史を受けた生徒が混在するグループを8つ作り、公衆衛生や環境など、リサイクルシステムに関する4種類の英文テキストをグループ内で分担して読み、内容を伝え合うリテリングを行った。英語担当の真木啓生先生はそのねらいを次のように語る。

「自分が見た映画などについて友人に話すように、自分が読んだ内容を

を英語で伝えるリテリングを行うことで、即興性を鍛えようと思いました。その課題文を今回のテーマに合わせて、さらに糞やトイレへの見方が広がるようにしました」

そうして、地理・日本史と4種類の英文テキストを読んだ多様なパートナーの知識や考えを持った生徒が1グループに混在するようにした上で、3時間目の英語の授業では、まず「あるべき未来のトイレ」を日本語で話し合い、1・2時間目で得た知識を出し合いながら言語化した。

「社会に出て働くようになれば、異なる情報や考えを持ち、問題意識も様々な人たちが、互いに意見を交

わしながら最適解を見つけだしていきます。そうした経験をしてほしいと考えました」(宮崎先生)

生徒は、ワールドカフェ形式(＊2)でアイデアを共有し、最後は1・2時間目の授業と他グループのアイデアを踏まえた「理想のトイレ」について英語で表現する課題に個々に取り組み、価値観の統合を試みた。

「英語が得意ではない生徒が、発表者に立候補した姿を見て、今回の授業に大きな手応えを感じました。授業では、正解が1つではない問題に対して、生徒が自分なりの考えを組み立て、表現する場面を設定しました。それが、生徒の内発的動機づ

けになったのではないかと思っ  
ています」(宮崎先生)

今後の展望

先が見えない社会だからこそ、探究学習が必要

今後の課題は、生徒をさらに深い思考に導くことだ。例えば、日本史では、糞尿処理の失敗がコレラの流行を招いた事実を取り上げ、自分がその時代の人ならどう対応するかを考えさせることを検討している。そうした課題に取り組みながら、教科の授業での探究学習の実践を深めていきたいと、宮崎先生は語る。

「教科学習では、知識・技能を活用できるレベルにまで高め、『総合探究』では、各教科・科目で培った知識・技能を統合して社会問題の解決に取り組むといったように、その2つは両輪で進めるものであり、どちらも欠かせないものだと思っています。今回の新型コロナウイルスの感染拡大は、まだ誰も答えを見つけれられていない課題であり、多様な視点でこの問題を検証し、その解決策を考える力が求められています。だからこそ、探究学習が必要なのだと強く感じています」

生徒の声

1つの問題を多様な視点で考えられた



3年生 古本彩乃

1時間目に受けた地理の授業で、室谷先生から「トイレはなぜ男女に分かれているのか?」と問われて驚きました。今まで疑問に思ったことがなかったからです。性には多様な見方があると知り、性的マイノリティーに配慮したトイレのあり方は、簡単には答えが見つからない課題だと思いました。3時間目の英語の授業で、1時間目に日本史の授業を受けた人の話を聞き、トイレのあり方は、性の問題だけではなく、衛生面や文化など、多様な視点から考える必要があることに気がつきました。そうして考えていくうちに、元々関心のあったジェンダーについてもっと知りたいと思うようになりました。ジェンダーについて調べ、トイレのあり方について自分の考えを深めていこうと思います。

知識や考え方を持ち寄れば、発想が広がることを実感



3年生 植田将英

1時間目の日本史の授業で、江戸時代には糞尿が作物を育てる肥料として売買されていたことを初めて知りました。ゴミを再利用するリサイクルやリユースは、現代になって始まった仕組みではなく、江戸時代から既に行われていたことに感動しました。3時間目の英語の授業では、メンバーを換えて話し合いをしましたが、同じテーマでも、みんなが持つ知識や考え方は実に多様でした。例えば、ぬれた手を乾かすのは、ハンドドライヤーよりも紙のタオルを使う方が衛生的であるとか、簡易トイレが日常的に使われている国があるといったことは初めて知りました。多様な人の知識や考え方を持ち寄れば、多角的に物事を見ることができ、問題解決への発想が広がると実感しました。

\*2 話し合いの手法の1つ。参加者が小グループに分かれて話し合った後、指定の時間になったら各グループ1人を除いて、新しいグループを構成し、同じテーマで話し合う。その際、残った1人が前のグループで話し合った内容を新たなメンバーと共有する。そうしたグループワークを繰り返して、最後に最初のグループに戻って、それぞれが話し合ってきた内容を共有する。